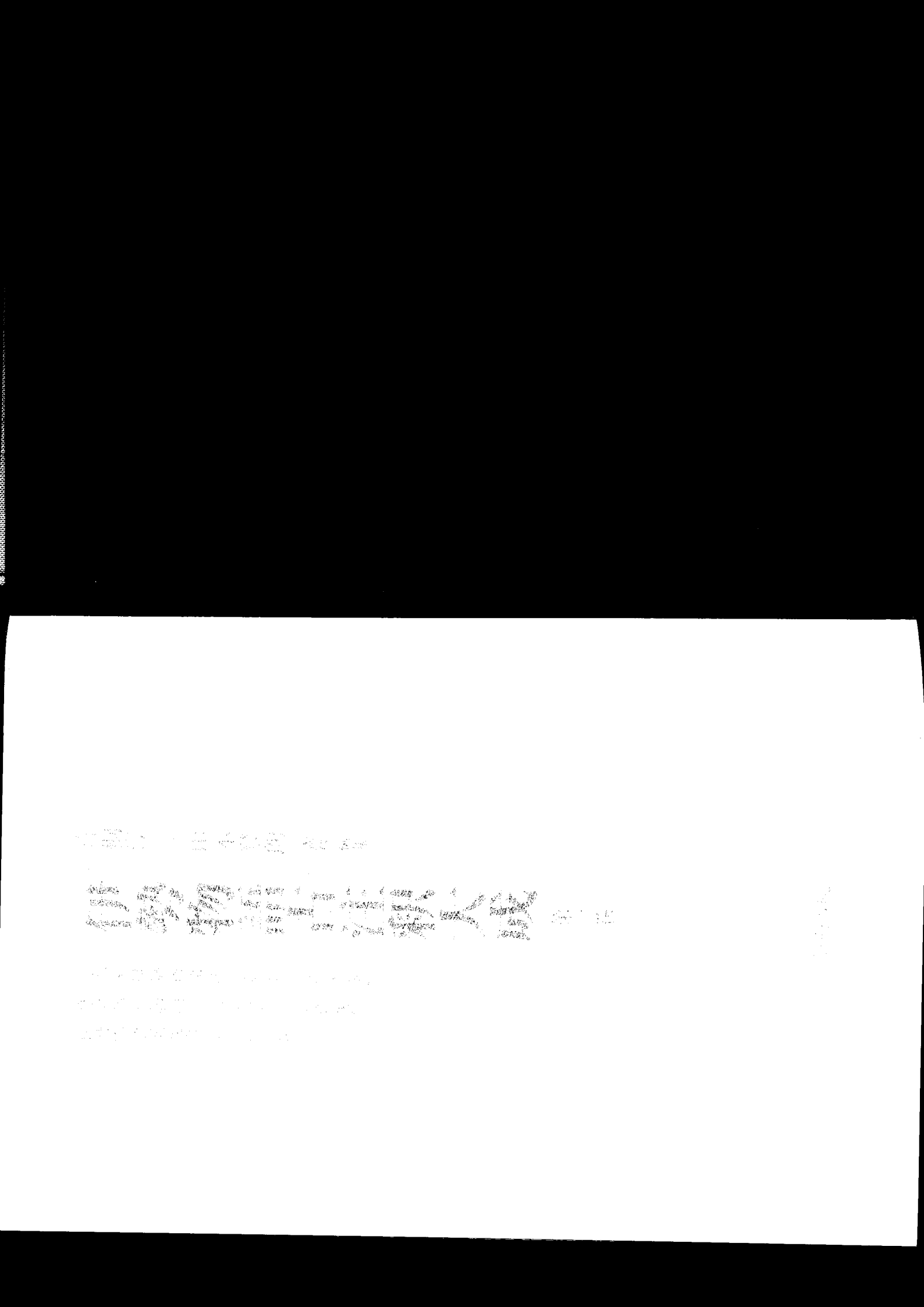


(8) 井上宗雄氏の『中世歌壇史の研究　南北朝期』（一九八七年、明治書院刊）を始め、通説は関東在住の廷臣一条能基のこととするが、疑問もある。『公卿補任』によれば、弘安八年の一月二十一日に能基は没しているので、東大本の「弘安九年十二月」はおかしい。

(9) 弘安元年に「閏十二月」はない。「閏十二月」があるのは、東大本が言う弘安九年である。

(10) 二〇〇〇年、笠間書院刊

(11) 注8参照。

(12) 『大和物語』の「心を取り」要約したというのか、『大和物語』、もしくはその登場人物が「心劣り」しているというのか、わからない。

(13) 片桐洋一所蔵。『伊勢物語古注釈コレクション　第一巻』（一九九九年、和泉書院刊）所収。

(14) 注4に同じ。

（片桐洋一）

【編集委員】

片桐洋一（かたぎり・よういち）
1931年生まれ。京都大学大学院博士課程単位取得。大阪女子大学名誉教授。主要著書『伊勢物語の研究［研究篇］［資料篇］』（明治書院）『伊勢物語の新研究』（明治書院）『源氏物語以前』（笠間書院）

【編集委員】

山本登朗（やまもと・とくろう）
1949年生まれ。京都大学大学院博士課程単位取得。関西大学教授。主要著書『伊勢物語論　文体・主題・享受』（笠間書院）『日本漢詩人選集・菅原道真』（共著・研文出版）『平安文学研究ハンドブック』（共編・和泉書院）

神田裕子（かんだ・ゆうこ）
1970年生まれ。早稲田大学大学院博士課程単位取得。早稲田大学大学院生。主要論文「河野美術館蔵『伊勢物語註　冷泉流』」（『王朝文学の本質と変容　散文編』和泉書院）「『玉水』の作品研究」（『演劇映像』第43号）「古活字本『謡抄』単辺十二行本の書誌学的研究」（『演劇研究センター紀要』III）

丸山愉佳子（まるやま・ゆかこ）
1976年生まれ。学習院大学大学院人文科学研究科博士後期課程在学中。主要論文「伊勢物語奥書集成稿（一）」（『国文学研究資料館文献資料部調査研究報告』第23号）「伊勢物語享受の実際 - 伊勢物語版本についての報告」（『学習院大学国語国文学会誌』第46号）

伊勢物語古注釈大成（いせものがたりこちゅうしゃくたいせい）　第一巻

2004年（平成16）10月30日　初版第1刷発行©

片桐洋一・山本登朗　責任編集

装幀　右澤康之
発行者　池田つや子
発行所　有限会社笠間書院

〒101 0064　東京都千代田区猿楽町 2 2 5
☎ 03 3295 1331(代)　FAX03 3294 0996
振替00110-1-56002

NDC 分類 913.32

ISBN4-305-70041 7 C3395
乱丁・落丁本はお取りかえいたします。
http://www.kasamashoin.co.jp

藤原印刷・渡辺製本
（本文用紙：中性紙使用）

凡例

一、本巻には、『十巻本伊勢物語注　冷泉家流』（鉄心斎文庫蔵）、『増纂伊勢物語抄　冷泉家流』（鉄心斎文庫蔵）、『伊勢物語奥秘書』（鉄心斎文庫蔵）の三書を翻刻した。

二、翻刻に際しては、次のような方針をとった。

1、各章段に章段番号を加えた。ただし、『増纂伊勢物語抄　冷泉家流』については、本来記されている章段番号もそのままに翻刻したので、新番号と旧番号の間に矛盾が見られる（解題参照）。

2、底本の漢字に、仮名は仮名に表記することを原則とした。ただし、漢字の異体字は正字（常用漢字は新字体）に改め、あて字は正当な漢字、またはひらがなに改めた。

3、あらたに句読点、引用符などを適宜加えて翻刻した。

4、底本の声点、濁点、長点は、原則としてそのまま翻刻した。したがって『十巻本伊勢物語注　冷泉家流』において、行の左傍に付されている濁点表示はそのままの形で残した。なお、底本にない濁点、半濁点、ふりがなは、一切加えていない。

5、底本の見せ消ちや訂正については、訂正後の本文に従った。ただし、後人による訂正、補筆、書き入れは、別に《　》で囲って翻刻した。

6、底本に朱筆で記された文字や記号は、そのまま翻刻し、「（朱）」の注記を添えた。

7、必要に応じ、他本によって、補充、訂正を加えたが、その際、補充に用いた他本の本文は、（　）で囲って示し、訂正の場合は右傍のルビの位置に（　）に入れて小字で示した。

8、底本の誤りや脱落と思われる部分で、他本によって訂正できない場合は、そのまま翻字し、ルビの形で「（ママ）」と記すか、明らかな誤りの場合は正しい本文を（　）に入れて右傍のルビの位置に小字にて記した。

9、底本の、虫食いや損傷等による判読不能箇所は、「□□」などのように、「□」をおおよそ想定される文字数だけ並べて示した。

十巻本伊勢物語注

冷泉家流

（鉄心斎文庫蔵）

片桐洋一
神田裕子
丸山愉佳子

『続日本紀』ニ云、是ハ恋ニ云事也。昔、称徳天皇ノ御時、橘安喜丸ト云人、武蔵国ニ下テ住ケリ。彼国ノ女ヲ思ケルカ、京ヘノホルトテ、形見ニ鐙ヲトラセテ行。此女、此鐙ヲ夜ハイタキテネケルカ、死シテ後、彼鐙、土ニ落テ生イ付テ、木トナル。此木、西ノ方ヘナヒキテ、夜ハ人ノ聞ハ、常ニ泣声アリ。今マテ鐙木トテアリ。其木ノ如クニ、常ニ君カ方ヘ、我モナヒキテ泣ト云意也。サレトモ、実義ニハ、上ノ義歟。

十四

陸奥ニスヽロニイキケルトハ、長良中納言、陸奥ノ国司ナリシ時、大原ノ内、栗原アネワノ谷ト云所ニ、住給シカハ、二条ノ后、未ト定ニテ、親ノ許ニ座シケル時、業平、通フ也。ソコナル女トハ、后也。京人ハメツラカニヤ思ケントハ、業平カ、京ヨリクルヲ、珍シトヤ思ケント云也。歌ニ永々ニ恋ニシナスハトハ、ナカラヘテ、恋ニシナスハト云義也。クワコトハ、繭（カイコ）也。カイコノ、ヒイルト成テ、ハツル事ヨリ外ノ事ナシ。ソレカ様ニ、命計タニイキタラハ、カイコニ成テントト云也。此歌ハ、『万葉』ノ七巻ニア

リ。其ヲ、二条ノ后ノ詠シ給也。是ハ田ノ上ヘノ黒樹カ女ノ許ヘヨミテ遣ス歌也ト云リ。歌サヘソヒナヒタリケルトハ、サコソ田舎ノ栗原ニ住カラニ、歌サヘイナカメキタルト云也。田舎ヲ鄙ト書テ、ヒナト読リ。夜フカク出ケリトハ、業平、京ニ行ヲ云也。歌ニキツニハメナテトハ、夜モアケハ、此鶏ヲキツネニハマセテ、夜フカク鳴テ、夫ヲヤリツルトヨメリ。他流ニハ、キツトハ、馬船ヲ云。サレハ、夜明タラハ、此鶏ヲ馬舟ニ打ハメテヲカテト云。馬舟ヲキツト云ハ、東マ詞也。クタカケト云ハ、鶏ヲ云。ニハトリヲ、クタカケトハ、白幣ヲ付テ、相坂龍田ノ関ニ放ツハ、世ノ中兵乱ノ時、四境ノ祭ヲシテ放也。クタヲ鶏ニ付テ、ソレニ木綿（シメ）ヲ付テ放ニ依テ、ユウツケ鳥トモ、クタカケトモ云也。又、他流ニ云、クタカケトハ、チイサキ家ノ鶏ト云也。クタトハ、少ノ義也。クタケタルト云意也。家ハイエ、ケハ鶏也ト云リ。家ノ義ハ不然。タヽ、クタヲ切テカケタル故ニ、鶏ヲクタカケト云也。他家ニハ、ヒヨ〳〵ノ鳴ヲ聞テ読ルト云。クタカケトハ、小鶏ト書リト云。サレハ、少キ鶏ハ、ヒヨ〳〵也。鶏ハ、カケト鳴ハ、クタカケトハ、小鶏ト云リ。当流ニハ、不然。男ヲセナト

云事、『万葉』云、

夜モ曙波狐丹食手倶達懸之末丹鳴天勢男於野利津留

又、云、

信乃路之薄井之山丹勢男波有登黒川野辺丹我波有哉

トヨメリ。是ハ昔、夫婦別々ノ所ニ住ケル時、女ノヨミテ男ノ許ヘ遣ス歌ト云リ。サレハ、セナトハ、男也。栗原ノアネハノ松ハ、ミチノ国ニアリ。此歌ハ、大原ニ、栗原ノアネハノ谷ト云所アレハ、彼所ヲ云也。思ヒケラシトソ云ヲクリケルトハ、后ノ、業平ハ我ヲ思ケリト云ナリ。

十五

一　ミチノクニヽテ、ナンテフ事ナキ人ノメニトハ、長良ノ、陸奥守ニテ大原ニ住セシ時ノ事也。ナンテフ事ナキハ、何ト云事ナシト云事也。人ノメトハ、彼后ハ、清和ノ妻也ト云意也。ワカヽク通ヘトモ、知ネハ、何ト云事モイハヌ人ノ妻ニト云意也。アヤシウ、サヤウニテ有ヘキ女トモ非ストハ、益有テ、左様ニ始終可通女ニ非スト云意也。歌ニ、シノフ山忍テノ歌、無義。サルサカナキトハ、カヽル后ノ身ニテ有ヲ、犯セハ、フルマイナキ事ヲミテハ、末

モタノマスト云也。『老子経』云、仁義礼智信ノ五常ハ、世ノ人ノ行（サカナリ）ト云リ。サレハ、サカトハ、フルマヒ也。サカナキトハ、振舞無ト云事也。エヒス心トハ、エヒスハ、物ヲ取ツメテ放タヌ物也。ソレカ様ニ、后ノ身ニテ有物ヲ、取ツメテ放ヌハ、エヒス心アル人也ト云リ。

十六

一　有常、三代ノ御門ニ仕ヘリケルトハ、淳和、仁明、文徳、是ヲ、三代ノ御門ト云。時ニアヘリケルトハ、サカヘタルヲ云也。『伯選』云、帝王ノ恵ミ、普臣下ノ相時ニ、道アリト云リ。是ハ、賢王之時ハ、臣下ノサカユルヲ云。有常カ親、三条ノ大納言紀名虎ハ、淳和、仁明二代之後見トシテ、有常モ随テサカユ。文徳ノ御時、名虎薨シテ、贈太政大臣トナル。此時ニ、紀ノ有常、少納言ニシテ為天下ノ後見。清和ノ御時ニ至テ、忠仁公、世ヲ取ハカラヒ給故ニ、有常、不宮仕、大和国ニ籠リ居タリ。ソレヲ、代替時移トハ云也。世ノ常ノ人如キモアラストハ、貧（マト）シキヲ云也。アテヤカナル事ヲノミコノムトハ、ヤサシキ事ヲノミ好也。世ノツネノ事モ不知トハ、世間ノ栄モ不知ト云意